

一八八四年九月二十八日(日)

ラームの家における聖ラーマクリシユナと信者たち

マハーシユタミーの日にラームの家に行かれた聖ラーマクリシユナ

今日は日曜日、マハーシユタミー。キリスト暦一八八四年九月二十八日。タクール、聖ラーマクリシユナはカルカッタに神像を参拝のため来ておられる。アダルの家で秋のドゥルガー大祭が行われるのだ。タクールは、三日間招待されている。アダルの家の神像を拝まれる前に、ラームの家を訪問なさった。ヴィジヤイ、ケダル、ラーム、スレンドラ、チュニラル、ナレンドラ、ニランジャン、ナラヤン、ハリシユ、バブラーム、そして校長が来ている。バララームとラカールは現在、プリンダーヴァンに行っている。(訳註、マハーシユタミー——秋のドゥルガー・プージャのお祭りの一つ)

聖ラーマクリシユナ「(ヴィジヤイとケダルを見やって笑いながら) 今日、いっしょになってよかつたね。お前たち二人の心境は、いま同じような深さだ。(ヴィジヤイに)——えーと、シヴァナートは？ あんたさんは……」

ヴィジヤイ「はい、仰せの通り、あの方はあなた様が彼の家を訪れることを聞いておられます。会っ

て話したわけではないのですが、ちゃんと伝えてあります。彼も知っているはずですが——」

タクールは、さきにシヴァナートの家に行かれて彼に会うおつもりだったのだが、留守だったのである。後でヴィジヤイがそのことを彼に知らせたのだが、シヴァナートはのびきならぬ用事のため、今日も顔を見せられないのだ。

聖ラーマクリシュナ（ヴィジヤイたちに）心のなかで四つの願いが起こったんだよ。

ナスを入れた魚のカレーが食べたい。シヴァナートに会いたい。数珠を練りながらハリ称名をする信者たちの様子が見たい。タントラ派の修行者たちが、アシユタミーの日に八アナ分(1/2ルビー)の酒を飲むのを見てあいさつをしたい」（訳註、アシユタミー——自分および黒分の八日目）

ナレンドラはタクールの正面に坐っている。現在、年齢は二十二と三の間である。話をなさりながら、タクールの視線はナレンドラの上におちた。とたんに、タクールは立ち上がって三昧に入られた。片足をナレンドラの膝の上におかれたままの状態で立っておられる。外界の意識は全く失せ、まばたき一つなさらない！

〔人格神と無相の实在——サッチダーナダとカーラナーナダマイー——ラージャリシとブラフマ
God impersonal and personal
マリシ——イーシュワラ・コーティとジーヴァ・コーティ——永遠完成者の境涯
ニテイヤシッダ〕

かなり経ってから、三昧は解けた。まだ歓喜の酔いはさめやらぬ御様子。タクールは自分に言い聞かせるように独り言をつぶやいたり、法悦にうっとりして称名したりしておられる。

「サツチダーナンダ！ サツチダーナンダ！ サツチダーナンダ（サット・チット・アナンダ）！ 言おうか？ いや、今日はこう言おう——カーラナーナンダマイー！ カーラナーナンダマイー（神の陶醉を与える女神）！ サ・レ・ガ・マ・バ・ダ・ニー（インドのドレミファ）。ニーに長居するのはよくない。——長いことは居られない。も一つ下に降りてこよう！

スベクシマ、スベクシマ、カウチ、マハカウチ
粗大、精妙、原因、大原因（いずれも意識の種類）！ 大原因まで行くと黙つてしまう。そこでは言葉が出てこない！

イーニトラ・コチ
神の分身は、大原因の意識まで行って、また戻つてこれる。彼等は、上に昇つたり、下に降りたりできる。屋根の上に昇つても、またハシゴをつたつて下りてきて、下の場所所動きまわることができる。上がったりがつたり——。七階の宮殿があつて、誰も外側の囲いのところまでしか行けない。だが、王様の息子は自分の家なんだから、七階から一階まで自由に上がり下がりすることができる。

いろいろな種類の火花がある。ある種のもものは、一つの模様の火花を出して、またしばらくすると別の模様の火花を出す。終わつたかと思うと、又々、新しい火花を出して、際限もなく変化し続ける。

ところが火花によつては、火をつけるとブスツと鈍い音をたてて、上に一度飛び上がつてそれでお終い！ いろいろ修行をして上に昇つても、その様子を報告することができない。普通の人間は、一生懸命に修行すれば三昧には入れる。だが、三昧から下りてきて、そこで見たものを語ることはできない。こういふのがあるんだよ——クニテヤシヤダ 永遠完成者、というのがね。彼らは生まれたときから神を求め、この世の事物には何の興味もない。ヴェエダにホーマ鳥の話があるだろう。この鳥は虚空の、高い、高いと

ころに住んでいる。その虚空で卵を生む。とても高い処なので、卵は何日もかかって落ち続ける。落ちながら卵は孵る^{かえ}。こんどはヒナが落ち続ける。何日も、何日も落ちる。落ちながらヒナは目を開く。だんだん大地に近づく^{かえ}とヒナはわかる——地面に落ちたら死ぬほかはないと。ヒナは鋭く叫んで、母親のいる方向へ向けて飛び立つ。地面は死だ。地面を見ると恐ろしくなるんだよ！そこで、しゃにむに母親を探す！母は虚空はるかに高く——。その方向に飛び立つんだ！もう決して脇見をしない。

神の化身の伴侶(付き従う人)として生まれてきた人たちは永遠完成者^{ニティヤシッダ}だ。そのなかのある人たちは最後の誕生だ。

(ヴィジャイに)お前たちは二つとも持っている——ヨーガ(神との合一)とボーガ(苦楽の経験)だ。ジャナカ王にもヨーガとボーガがあった。だからジャナカをラージャリシという。つまり、王^{ラージャ}と見神者^{リシ}の両方というわけだ。ナーラダはデーヴァ^神リシ、シユカデーヴァがブラフマリシ。

シユカデーヴァはブラフマリシで、ただの智者じゃない。神の智識そのものの権化^{ごんげ}だ。智者とはどういう人のことかわかっているかね？智識を獲た人——それも大変な修行勉強をして智識を獲た人のこと。シユカデーヴァは智識の権化^{ごんげ}、つまり、智識が固まって人間の姿になった方だよ。自然にそうなったので、勉強や修行をしてなかったのではない」

こんな話をなさりながら、タクル、聖ラーマクリシュナは平常の意識に下りてこられた。今度は、信者たちを相手に話ができる状態になられた。

ケダルに歌をうたうようにとおっしゃった。ケダルは歌う——

一、心のたけを語ろうにも

それは固く止められている

思いやりのある人がいなけりや

命の炎は消えるだけ

その目をジッと見つめたら

心の友はすぐわかる

浄らかな愛の海に入り

甘露みなもの水面で泳ぐのは

わずかに一人か、また二人(パルテ)(法悦の状態になる人のこと)

二、ガウルの愛の大波、わが身にかかりぬ

ガウルの聖き愛の波は

三界のすべてを浸し

ガウルの聖き愛の海に

われ 悦びて沈み入りぬ

ああ友よ ほかの誰か

世の悲しみの泥沼より
ひきあげて救い給うか

三、愛の辛さを存ぜぬ御方

歌が終わると、再びタクールは信者たちと話をなさる。ケーシャブ・センの甥、ナンダラルも来ていた。彼も、二、三のブラフマ協会の仲間たちといっしょに、タクールのすぐ傍に坐っている。

聖ラーマクリシュナ「ヴィジャイはじめ信者たちに」ある人が酒の入った瓶を持ってきてくれたが、わたしはさわることもできなかったよ」

ヴィジャイ「アハー！」（嘆声）

聖ラーマクリシュナ「自然にまかせていて嬉しい気持ちになれば、わたしはその場で酔ってしまっ
んだ！ 酒なんか飲む必要はない。聖足水チャラターカリタを見さえすればわたしは酔うのさ。酒の五本も飲んだよ
うにね！」

〔智者と信仰者の状態——智者と信仰者の食事の規則おきて〕

「こういう境地では、いつ、どんなものでも食べられる、というわけにはいかないんだよ」

ナレンドラ「食べ物については、来るものは拒まずこぼ、という態度がいいと思います」

聖ラーマクリシュナ「特別な(修行の)段階ではそれもいい。智者にとつては何でもかまわないんだよ。ギーターの考え方では、智者は自分が食べるのじゃなくて、クンタリニーに供養するのだから——。

信仰者の場合は、それは当てはまらない。わたしのいまの境地では、バラモンが料理して神に供えたあとのものでなければ食べられないんだよ！ 以前には、ドフケネシヨル南神村の向こうの方から臭ってくる死骸を焼く匂いが甘く感じられたときもあつたがね。今は、誰でもがふれたものを食べることは出来ない。出来ないにはちがいないが、たまには食べることもある。ケーシャブ・センのところの舞台でする(新しい)クナヴァ・プリンダーヴァン^クという芝居を見に連れて行かれたことがある。そこで、ルチとカレーが出た。持ってきたのが、洗濯屋か床屋か(カーストの種類)わからないが(一同笑う)、おいしく食べたよ。ラカールが、『少し召し上がれ』と言ったものだから——。

(ナレンドラに向かつて) 今、お前はそれでいいよ。お前はコレにも行つて、アレにもいるんだから！ 今は何でも食べていい。(訳註、コレとアレ——靈的世界と俗世界)

(信者たちに向かつて) 豚肉を食べていても、もしその人が神を慕っているなら幸いだよ！ ハヴィシヤ(清浄な食物——穀物、ギーバターの一種、野菜など)を食べていても、女と金のことはかり思っているなら下卑な恥知らずだ！(訳註——豚は人糞も食べる不浄な動物なので、ヒンドゥー教徒は豚肉を食べるのを嫌う)

〔以前の話し——最初の狂気状態のときカーストの区別がなくなる——カマールプクルへの旅——鍛冶屋〕
〔の女房ダニ——ラームラルの父親——ゴヴィンダー・ライを通してアツラーのマントラを受けたこと〕

「鍛冶屋かじやの家にいったとき、ひよこ豆まめのスープが食べたくなかった。子供のころから鍛冶屋が、『バラモンバラモンさん方に料理がわかるかね?』と言っていたのを聞き覚えていてね、だから食べたんだが、鍛冶屋の臭いがしたよ(原典註)。(二同笑う)。

ゴーヴィンダ・ラーイー(訳註)のところでアッラーのマントラを受けた。クテイ(寺の建物の一つで客の泊まる)ところで玉ネギ入りの混ぜ飯をつくった。少しばかり食べたよ。マニ・マリツクの別荘でカレーを食べ

(原典註) ラーマクリシュナが九才になる時に、聖紐授与式(ウパナヤナ)を行うにあたって、鍛冶屋の女房ダニがその儀式の準備一切を布施として引き受けた。低いカーストの布施による儀式に長兄ラームクマルの反対があったが、父親クディラムの友人ダルマダース・ラハの助言で、式は滞りなく行われた。ダニはこのほか喜んで、自分の人生に神の恵みが与えられたと感じた。(日本ヴェーダーンタ協会発行「ラーマクリシュナの生涯 上巻」P66より)(訳註) ゴーヴィンダ・ラーイー一八六六年の終わりごろ、南神村トネナカに來たスーフイー(禁欲を守り自己を消滅させアッラーとの合一を目指すイスラム教の修行者)で、ラーマクリシュナは彼の祈祷する姿を見て、この人が見真(神)者であることを見抜いた。ゴーヴィンダ・ラーイーはクシャトリアの階級に生まれ、ベルシャ語もアラビヤ語も学んでいた。数種の宗教を勉強した結果、自由簡明なイスラム教の教理に最も心が惹かれ、正式にイスラム教徒となった人である。ラーマクリシュナは彼の手引きでイスラム教の修行を行った。イスラム教徒風の衣服をまとい、一日中、カーリー寺院境内のガジタラでアッラーの名をくりかえす。そして、イスラム教思想の奥底にある真理を映し出すべく、一点に集中する。そして僅か三日の修行で、マホメットに会った。長い髭をはやし、おごそかな顔をした光り輝く人物が近づいて来て、彼の中に入ってしまった。ただちにラーマクリシュナはイスラム教の聖典コーランに記述してあるような属性を持つ無形の神を実感し、つづいて無人格的な神、すなわち属性なきブラフマンに到達した。

だが、このときはなんとなく嫌な気がした。(訳註2)

郷里に行ったら、ラームラルの父さんが怖がるんだ。わたしが、どこの家にも行ってモノを食べやしないかと思つて——。そんなことで、カーストから追放されやしないかと心配したんだね。だから、あまり長く泊まつていられなかった。帰つてきたよ(訳註、ラームラルの父さん——ラーマクリシュナの次兄ラーマーシユワル)

〔ヴェーダ、プラーナ、タントラにおける清浄行〕

「ヴェーダやプラーナでは清浄行ということを使う。ヴェーダやプラーナで、不浄の故になすべからず」と言っていることが、タントラではいいことだと言う。

わたしは、まあ、何という境地を通つてきたことだろう！ 上あごを虚空に、下あごを下界につけて、大実母と発音したものだつた。マーをつかまえた！と感じじたよ。水をかき分けて魚をギユツとつかまえたように——。歌にあるよ——

今度はカーリー、お前を食べよう

(食べるよ、食べるよ、かわいそうなダヤー・マイ)

食べてもマールを胃袋には入れない

(胃袋には入れない)

胸の蓮座にちゃんと坐らせて

大事に、大事に祀ってあげよう

母を食う烈しい星の下に生まれた

息子の私をあんたが食べなけりゃ

私がほんとお前を食べて

二つを一つにしてしまおう

手足も口もまっ黒に塗って

からだ中を黒く塗ろう

死がやってきてくわえたら

その口も黒く塗ってやる

(訳註2) 修行時代はカーストの意識が薄れていたもので、鍛冶屋の作った料理やスーフイーの作った料理を食べることには抵抗は感じなかったが、マニ・マリツクの別荘で食事をした時はカーストの意識を感じていたので、実業家で金持ちのマニ・マリツクの家で出された料理を食べることに、嫌な気がしたものと思われる。

もしカーリーを食べたなら

カーラ(絶対者シヴァ)の手で打たれるというけれど

私はそんなことこわ恐くない

打たれても、打たれても、マーの名を呼ぶよ

ダキニ ヨーギニ
女鬼や尼さんに

野菜を添えて食べてしまふ

頭蓋骨の首飾りをもぎとつて

サフラン
香料の油で揚げてやる

ラームブラサードはカーリーの息子だと

世間にはつきり知らせよう

その真言マントラ(カーリーの名前)を修行して

命を落としてもかまわない

まったく気狂いみたいになっていた。ほんとに夢中だったよ！」

こんどはナレンドラが歌いはじめた。――

ラームブラサード――ベンガルのタントラ派
の詩人

マーよ、梵女神よブラフママイ

私を狂わせておくれ

智識も分別も用はない

歌を聞きながら、タクールは再び三昧に入られた。

三昧が解けると、タクールはギリラーニ（ヒマラヤ王ギリの妃、ウマーの母）の気分になって、アーガマニ(訳註3)を歌われた。ギリラーニは愛情込めておっしゃる——私のウマーは来ましたか？ タクールは愛に狂った様子でおうたいになる。

歌が終わると、タクールは信者たちにおっしゃった——「今日はマハーシユタミーだったね。マーが来ていなさる！ だから、こんなに興奮するんだよ！」

ケダル「主よ！ あなた様がおいでになる。あなた様のほかにマーがあるのですか？」
タクールはあらぬ方を眺めながら、放心の態ていで歌をうたわれる——

(訳註3) アーガマニ——シヴァ大神の妃となったヒマラヤ王の娘ウマーが、両親のもとに里帰りした時に、ウマーの母親が娘を心配してうたった歌、ベンガル語ではアゴモニ。女神ドゥルガーもしばしばウマーと呼ばれ、ドゥルガー・プージャの祭に先だって、嫁ぎ先から帰ってくる娘を待ちわびる気持ちを込めて歌われる。

ねえ、サキー——ほんとに何処どこにいるのやら
私を気狂いにしたお方

ブラフマーも狂い、ヴィシヌヌも狂い

おまけにシヴァまで狂わすお方

三人が狂ったために

ナバドウィープに騒ぎが起こる

そして一人の気狂いが

プリンダーヴァンに詣る途中

ラーダーを王様のように飾りつけ

また一人の気狂いは

ナバドウィープへの道を行く途中

ラーダーの愛の酒に酔って踊る

つづいてタクールは、全く法悦に酔いしれて歌われる——

いつ、どんなに愉快な遊びをするか、誰が分かるだろう

サキー——ラーダーの友人の牛飼ゴい乙女ビ

マー、シャーマ 至福の波であるお方！

タクールが歌っておられると突然、「ハリボロ、ハリボロ」と言いながらヴィジャイが立ち上がった。タクール、聖ラーマクリシュナは法悦に酔いつつ、ヴィジャイはじめ信者たちと共に踊りはじめられた。

聖ラーマクリシュナ、信者と共に

キールタンが終わって、タクール、聖ラーマクリシュナ、ヴィジャイ、ナレンドラ、および大勢の信者たちは席についた。一同の視線は一樣に、タクールに注がれている。日暮れにはまだ間がある。タクールは信者たちを相手に話をしておられる。皆の健康状態についてお尋ねになった。ケダルが非常にへり下った態度で合掌しながら、やさしい静かな口調でタクールに何事か申し出ている。そばにはナレンドラ、チュニラル、スレンドラ、ラーム、校長、およびハリシュがいる。

ケダル「へりくだった様子で聖ラーマクリシュナに向かって）めまいを防ぐには、どうしたらよろしゅうございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「やさしく）そういうこともあるよ。わたしもそうだったもの！アーモンド油を少しづつ使ってごらん。あれはめまいに効くそうだから——」

ケダル「では、おっしゃる通りにいたします」

聖ラーマクリシユナ「(チュニラルに) どうだね、お前たちはどんな具合だね?」

チュニラル「はあ、今のところ、万事うまくいっております。プリンダーヴァンでは、バララームさんもラカールさんも元気でやっております」

聖ラーマクリシユナ「お前、何であんなに沢山サンデシユを送つてよこしたんだい?」(訳註、サンデシユ——チーズ入り砂糖菓子)

チュニラル「はあ、プリンダーヴァンから持ってきたので、その——」

チュニラルはバララームといっしょに聖プリンダーヴァンに行つて何ヶ月か滞在していた。休暇が終わつたので、最近カルカッタに戻つてきたのである。

聖ラーマクリシユナ「(ハリシユに)——お前は、一日、二日してから行きな。まだ病気がすっかりよくなつていないんだから——。また、あそこ(南神村)で寝込むことになるといけないから——」

(ナランに向かつてやさしく) お坐り、そばに来てお坐り! 明日、お行き——。行つてあそこで食事をおし。(校長を見て) この方といっしょに行くのかい? (校長に) どうかね?」

校長はこの日、タクールといっしょに南神村(トフキネーシヨ)に行きたいと思つている。だから、こう言われて考えました。スレンドラは長い間ここにいたが、途中、いったん家に帰つてから、また戻つてきてタクルの傍に立っている。

スレンドラは酒を飲む。以前はよく飲み過ぎた。タクールは、そうしたスレンドラの状態をみて、心を痛めておられた。しかし一度も、飲むのを止めるゝとはおつしやらない。「スレンドラ! ね、

飲む前に神様にお供えしろ。そして、頭や足がフラつかないようにしろ。神様のことを一生懸命やっている、酒がそんなに好きでなくなるよ。あの御方はカーラナーナンド——酔うほどの飲びを与えてくださる御方だ。あの御方をつかめば、そのままの自然の状態で楽しくなるよ」と、おっしゃるだけである。

スレンドラはタクルの傍に立っている。タクルは彼の方をじーっとごらんになりながらお立ちになった。「お前、酒を飲んでるね？」とおっしゃって、そのまま三昧にいられた。

日が暮れた。間もなく意識を戻されたタクルは、マーの名を唱えて喜ばしげに歌をおうたいになった。

よろこびに 我をわすれて

大実母はシヴァと共に踊りたわむれ

美酒飲みて、ゆらりゆらりと

よろめくとも倒れはせず

シヴァの胸の上につきくと立ち

マーのみ足もと、世界は震える

マーとその配偶つま(シヴァ)は歓喜して

恥ずかしさも恐れも眼中になし

日はとつぷり暮れた。タクール、聖ラーマクリシュナはハリの名を唱えていらつしやる！ 時々、手をお拍うちになる。やさしい声で——「ハリボロ、ハリボロ、ハリボロ、ハリボロ、ハリ、ハリ、ハリボロ」

こんどはラーマの名をお唱えになる——「ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ！ ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ！」

〔タクールの祈り——How To Pray (如何いかに祈るか)〕

こんどはお祈りをなさる——「おお、ラーマ！ わたしは祈りも足りない、修行も足りない、智識も足りない、信仰も足りない、行いも足りない！ ラーマよ、シヤラーナガタ！ おお、ラーマ、シヤラーナガタ(すべてあなたにお捧げします)！ 肉体からだの悦よろこびは要いらない、ラーマ！ 名譽なごも人望ひとぞもいらぬ、ラーマ！ 八大神通力もいらぬ、ラーマ！ 百通力もいらぬ、ラーマ！ お助け下さい！ お護り下さい！ ただ、これだけは——あなたの蓮まの御足ごそくに純粹まな信仰しんぎやうを持てるように、ラーマ！ それから、も一つ——あなたの世にも魅惑ま的な現象げんさうに迷まわされぬように、ラーマ！ おお、ラーマ、そのようにお護り下さい！

タクールが祈っておられる姿を、一同はまたきもせず見ていた。タクールの胸をえぐるような哀訴あいその声を聞いて、誰一人、落涙らくなみを抑えることはできなかつた。

ラームはタクルルの傍にきて立っていた。

聖ラーマクリシュナ「(ラームに向かつて)——ラーム！ お前、どこにいた？」

ラーム「はあ、上におりました」

タクルルと信者たちをもてなすため、ラームは屋上で準備していたのである。

聖ラーマクリシュナ「(ラームに)——ハッハッハッハ、上にいるより下にいる方がいいんじゃないかね？ 低い土地には水が集まるが、高い所の水は流れ落ちてしまうからね」

ラーム「あはははは、ほんとうに、その通りでございます」

屋上に食事の支度が整った。ラームは、タクルルと信者たちを案内して、満足のゆくまで十分に接待した。饗宴が終わってから、タクルル、聖ラーマクリシュナは、ニランジャンや校長たちとアダルの家を訪問された。そこには大実母^マがお祀りしてあった。今日はマハーシュタミーなのだ！ タクルルに来て拜んでいただけば、どんなに家の慶福^{よきゆき}になることかと、アダルが特別にお願いしたのである。